

自然の恵み その源をみつめなおす 特集：生物多様性と信州

地球温暖化の問題は化石燃料を通じて生産・流通・消費のそれぞれの場面に直結しています。それに対し、生物多様性の問題は日々の暮らしや経済とどうつながるのか実感しにくいかも知れません。しかし多くの原材料や食料を輸入している日本の経済と消費生活は、輸出国の生物多様性に大きな影響をあたえています。一方、日本の農林業の苦境や里山の荒廃は、これと表裏の関係にあります。



生物多様性の宝庫 熱帯雨林

現在、地球上で年間4万種の生物が絶滅しつつあるという推定があります。しかしこれは生物多様性の問題の一面にすぎません。生物多様性ということばで、種の数の多さのほか、生態系の多様性とそのはたらきの重要性、遺伝資源の多様性とそこからの利益の配分などの問題が議論されています。

こうした自然のさまざまな多様性から、人間は農作物などの食料や木材などの資材、医薬品、昆虫による植物の受粉、文化の礎や観光資源など、無数のさまざまな恵みを受け取っています。これらの自然の恵みを「生態系

サービス」として評価しようという経済学の分野では、この無償のサービスを貨幣に換算した場合、世界のGDPの総計を大きく上回るという推定もなされています。生態系サービスの劣化は、企業の事業コストの増大など、人間生活のさまざまな面に脅威をもたらします。国連はこの生態系サービスの現状を評価し、その多くが劣化していると報告しています。それぞれの地域の生物多様性の特色を保全し、その恵みを持続可能なたちで利用できるような社会のあり方にしていくことが、世界の共通目標になっています。

信州は、生物多様性の特色を日本で最も豊かにもつ地域のひとつです。それは美しい自然環境をもたらすとともに、貴重な観光資源にもなっています。今年は生物多様性にとって節目の年です。国連の国際生物多様性年であり、10月には名古屋で生物多様性条約第10回締約国会議が開催されます。この機会に、信州の生物多様性の現状、そしてわたしたちの生活とのかかわりをさまざまな面からふりかえってみたいと思います。

(須賀 丈)



生態系サービスのひとつ ハチによる花の受粉

生物多様性の保全に向けた県・国の取組みについて

市原 満

生物多様性の保全は、わたしたちの存立基盤に関わる地球規模のたいへん重要な問題であり、平成4年(1992年)の地球サミットでは、気候変動枠組条約とともに生物多様性条約が採択されました。

わが国では、平成7年(1995年)以降、生物多様性国家戦略を順次策定・改定し、また、平成20年(2008年)6月には生物多様性基本法が制定されるなど、生物多様性の保全と持続可能な利用のための取組みを推進しているところです。

本県では、従来から希少野生動植物保護条例に基づき、ライチョウ・ミヤマシロチョウなどの希少野生動植物保護のための様々な取組を展開してきたところです。これに加え、県下の豊かな生物多様性を保全し、その恩恵を将来にわたって享受して、魅力溢れる地域を持続していくために、平成22年度(2010年度)から2ヶ年をか

けて、生物多様性地域戦略の策定に取り組みます。

(いちはら みつる / 長野県環境部自然保護課)



信州の特色ある自然景観(上高地)